

	<p>日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部 NEWS LETTER</p>	<p>2021年9月8日発行 第71号 事務局長 小島 彬 TEL/FAX : 077-589-3724 Email : akrkojima@ybb.ne.jp</p>
---	--	--

【報告】JSA定期大会と第2回全国幹事会

大会代議員・全国幹事 畑 明郎

1. 第52回定期大会

大会決定と57期役員一覧は、『日本の科学者』8月号付録として配布されているので、大会で不採択となった京都支部提案のポストコロナ決議案について報告する。本決議案は、昨年の第51回定期大会で同様の決議案が京都支部から提案され、代議員から互選された起草委員会により、大会に提案されなかった。

この事態を受けて、第52回大会では幹事会に起草委員会が設置され、提案された決議案を事前に検討したうえで、幹事会が決議案を提案することになった。幹事会は京都支部提案の「ポストコロナの新しい社会に向けて、科学者としての役割を発揮しよう」を含めて5本の決議案を大会に提案した。

しかし、幹事会の一員であるある支部所属の幹事(K氏)が、「専門家から見て不十分な内容なので、議論を継続する必要があるとの見解から、本大会で採択するのはやめるべき」との強い反対意見が出された。なお、K幹事は昨年の大会時の起草委員でもあった。

議事運営に混乱があったが、大会で決議案採択の可否投票を行い、賛成12、反対13、保留23で不採択となった。

2. 第2回全国幹事会

7月4日に開かれた第2回全国幹事会に京都支部のS幹事から「K氏の全国幹事としての資格を問う—全国幹事会への要望」という動議が提出された。京都支部の要望は、「①K氏は決議案を提案した幹事会メンバーなのに、決議案決定まで幹事会で発言しなかったにもかかわらず、大会で突然反対意見を述べることは組織原則違反である。②K氏発言は、JSA会則の精神に反し、全国幹事の資格を欠くので、幹事の資格停止を求める。」ものだった。

これに対して、「①幹事会の決議案検討はわずか30分間であり、決議案の詳細検討は不可能である。幹事会は起草委員会の決議案を承認しただけであり、幹事は大

会で自由に決議案に対する意見を述べる事ができる。②幹事の資格停止は会則にないので、幹事会で審議できない。」などの反対意見が出された。長時間にわたる審議の結果、動議は、賛成6(私を含む)、反対17、保留3で否決された。

私は、「①K氏の対応は組織原則に違反しており、ポストコロナ決議案は通すべきであった。②京都支部要望のK氏の幹事資格停止は会則にないので、資格停止よりもK氏に釈明と謝罪を求めるべきだった。」と考える。

(大会の論議では、さまざまに意見が出されています。詳しくはJSAのホームページの「第52回定期大会議事要録第2日」をご覧ください。なおログインの仕方をご希望の方は、滋賀支部事務局長までお尋ねください。)

【報告】第11回彦根ピースフェスタの開催

—高校生が描いた「原爆の絵」展示会—

個人会員分会 水原渉

昨年の彦根ピースフェスタは、コロナ禍を考慮して中止したが、今年は、コロナ禍でも開催可能な形式を検討した結果、南彦根の大型商業施設であるヒコネ・ビバシティのセンターモールで、8月18日から23日まで、原爆絵画展を開催した。

内容は、広島市立基町高等学校の創造表現コースの生徒が描いた「原爆の絵」(複製)63点や核兵器禁止条約ポスターなどの展示で、掲示板12枚に貼るなどしてセンターモールを通行する人に目を向けてもらおうというもの。最終的に3千人以上の観覧者を得て成功裏に終わった。

被爆直後の生々しい被爆実態は、撮影した写真は残っておらず、絵による表現しかない。「原爆の絵」は、高校生が被爆者の話と意見を何度も聞きながら作成した絵画であり、自分がその場に立って見たらという想像をかき立てるなど、被爆の悲惨、残酷を強く伝える力作ばかりだった。被爆体験者が減っていく中で、貴重な作業でもある。写真ほどに生々しくないことも、多くの人に見てもらおうと、効果があったと思う。

食い入るように見ている人、子供に熱心に説明している子連れの子連れの母親などが多くみられた。母親が偶然に広島を離れていて助かったという人もいた。中には何度も見に来てくれた人もいたということだ。「かんそう・メッセージ」でも、多くの人が、原爆の悲惨さを如実に伝えてくれた高校生に感謝し、子供たちを含め、こんな悲惨な出来事は二度と繰り返してはならない、戦争は絶対ダメという決意、核兵器禁止条約を批准しない日本政府に対する批判など様々な思いを書いてくれた。

ナクツァン・ヌ口著「ナクツァン少年の喜びと悲しみ」の翻訳を終えて

県大分会 棚瀬慈郎

昨年(2020年)10月に、私は、2007年に中国の青海省で出版された「ナクツァン少年の喜びと悲しみ」という本を翻訳出版した。(邦題「ナクツァン あるチベット人少年の真実の物語」集広舎刊)

著者のナクツァン氏は職業的な作家やジャーナリストではなく、むしろ官僚の世界でキャリアを積んできており、青海省チュマル県の副県長などを歴任してきた。この本は、彼が官職からの引退後に、少年時代の思い出を1冊の本にまとめたものであり、自費出版されるや主に青海省のチベット人の間で熱狂的に受け入れられた。

本書は5章よりなるが、内容的にみると、1950年前後の、黄河上流域に展開するチベット遊牧社会を描いた第1章と第2章、ラサへの巡礼を描いた第3章、人民解放軍の進攻下における逃避行と、牢獄、寄宿舎での生活を描いた第4章と第5章の三つに分類される。

中国の進攻以前、東チベットの多くのチベット人居住地帯では、ラサを中心としたチベット政府の支配を受けず、地域ごとに在地の族長や僧院の支配を受けていた。著者の生まれたチュカマ周辺に遊弋する遊牧集団は自らをデワと称し、一人の族長の下、他のデワとは潜在的な対立関係にあった。当時チュカマのデワは、隣接する他のデワとの抗争に敗れ、集団で北方に移動していた。一方チュカマの僧院そのものは元の黄河南岸の位置に留まっており、少年時代のナクツァン氏も多くをそこで過ごしている。

ナクツァン氏は6歳の時、すなわち1953年の春から約1年をかけて、ラサを中心とするウツァン地方への巡

礼に出かけている。当時、東チベットからラサへの巡礼はコミュニティ全体の行事であった。ナクツァン氏が参加した巡礼では、近隣の約100家族がキャラバンを組み、武装した男たちに守られながら、経験豊かな道案内に先導されて進んだ。道中ではゴロクやウルゲといった勇猛な部族からの襲撃が度々あり、さらには狼の群れや北部平原の寒気とも戦わねばならなかった。

本書の後半では、一転人民解放軍進攻後の世界が描かれる。

共産党の手口は陰湿かつ悪辣、どのような非難を連ねても足りないような無慈悲なものであった。特に人々を深く傷つけたのは、人々が大切に維持してきた存在を、自らの手で破壊することを強制したことである。日々の宗教生活の中心であり、また不安定な遊牧生活の中にあっては社会的な固定拠点としても重要な機能を果たしていた僧院は、僧自らの手で破壊され、また人々の尊敬を集めてきた高僧や族長は、いわゆる「批判闘争」の中でチベット人によってなぶり殺しにされた。

ナクツァン氏兄弟は父親に連れられて、僧俗10名の集団で故郷を脱出してラサを目指した。しかし結局途中で人民解放軍と遭遇し、銃撃戦の末その場で父親をはじめとする3名が殺され、残りの7名は囚われの身となってしまう。ナクツァン氏とその兄は、まだ幼いということと理由に一旦収容された土牢(地面に穴を掘って作った、急ごしらえの牢獄)を出されて、寄宿制の学校に入れられる。しかし、折からの大躍進時代の混乱の中で食料の供給は途絶えて餓死者が続出し、千人程もいた子供は、1958年の冬から翌年の春にかけての数か月のうちに、僅か50人程にまで減ってしまったのである。生存のための、ナクツァン氏兄弟の日々の戦いについても本書では詳しく描かれている。

この本は一つの豊かなテキストとして、多くの読み方ができる。しかし私は、ホロコーストの証言と同様に、何よりも人類の愚行の証として、チベット人のみならず全人類によって読み継がれていかねばならない著作だと信じている。そして猛々しい、誇り高き男たちがなぜチベットの荒野で無残に殺されねばなかったのか、いたいけな子供達がなぜ両親を失った挙句、満足な食べ物も与えられず餓死せねばならなかったのか、考え続けて欲しいと願うのである。